終戦後の戦闘

愛知県　加藤武憲

私は昭和十六年三月帝国大学医学部を卒業、直ちに近衛歩兵一連隊で軍医要因教育を受け、衛生軍曹に任官、十七年二月召集、名古屋の歩兵六連隊に入隊見習士官となり、五日後に中支派遣となり、軍医三人で南京の独歩五十六大隊に到着、大隊付医官として勤務、十八年六月師団改編に伴い宿県に移動、付近の討伐に参加中に野戦病院が南京からやってきたので、海州の野戦病院に転属したのが二十年二月ごろでした。

そのうち終戦になり、復員を待ち焦がれていたのですが、年の改まった一月十六日の午前一時（今でもハッキリ覚えています）木村副官に叩き起こされ、新安鎮にいる一三六大隊が中共軍に包囲され死傷者が出ているので救出のため六〇大隊の配属野戦病院になって行け、との命令です。どうして包囲されたのかというと中共軍が一三六大隊に武器の引き渡しを要求したんですね、重慶軍に武装解除される前にこっちに寄越せということですね。重慶軍はもし中共に渡したらお前たち日本兵は内地に帰さないぞ、とおどかすんですよ。

終戦後五か月経っていても武器は持っていました。中共軍が鉄道爆破や攻撃をしてきて大勢死んでいるものですから武装解除はつい三日前に野戦病院がやったばかりで、鉄道整備の一三六大隊や本科の六〇大隊は武装していました。一三六は渡さない、取れるものなら取ってみろと中共の要求をハネつけたものだから包囲されちゃった。

そのうち復員船が連雲港に入った情報があり、脱出せんことにはどうにもならんと救出を頼んできた。海州の師団から六〇大隊に出動命令が出され、死傷者が出ているから野戦病院をつけろとなった。終戦後ですから誰もいまさら戦闘に行きたくないですよね。

軍医さんも頬かぶりで知らん顔しているものですから若い私にお鉢が廻ってきた。

私は五六大隊付きとして何度も討伐に出ていますので

戦闘に馴れていたので半ば志願して行ったのです。問題は兵隊ですね。野戦病院ですから担架兵と衛生兵の二つがあるのですが担架兵は歩兵ですからしっかりしています。

衛生兵が九州から来た戦闘経験の全くない初年兵で、しかも繰り上げ徴集の十八、九歳の子供ですよ。それから武器は三日前に返納したのですから何もありません。副官がどう工面したのか、急いで集めてきましたが私の軍刀が他人の物です。私のは肥前の忠義という銘刀です。「違うぞ」と言ったら探して持ってきました。

兵隊を連れて海州の駅に行ったら六〇大隊の兵隊は全部列車に乗って野戦病院の到着を待っていました。六〇大隊長、南波大佐に「野病到着しました」と申告して乗車したんですが、月がこうこうとして照って錦屏山がくっきりと見えるんですね。アア二度とこの山が見られるかなあーと少しいやな感じだったですね。

終戦で軍人精神がすっかり抜け切っていたんですね。戻すのに苦労しました。兵隊も同様ですよ。古年兵は練兵休をきめこんで、たった一人出て来ただけですよ。腹が立ったので、その一人も「来んでよい！」と戻しました。

貨物列車で出発したんですが途中鉄道が爆破されて進めず、下車して行軍、途中一泊、翌朝四時半に起きて炊飯やったんですが初年兵だからなかなか飯が炊けないんですね。やっと引率して集合場所に行ったら部隊の姿が見えない。困ったなあ、置いて行かれてなあと感じた。本当のところ、いっそこのまま戻ろうか、陸軍省も無くなったことだしと思いましたね。でももう一度部隊を探そうと高い所へ上がって見たら目の下にズラッーと部隊が整列しているじゃないですか。寒さにガタガタ震えながら「野病の奴ら何をしているんだ」とブーブー言っている。

南波大隊長に「只今、野病到着しました」と申告したら叱られましてね。しかし南波さんはエライ人で「お前昨晩、酒を飲んだろう」そのころは私は酒の飲めない体質だったんですが、仕方ないから「ハイ飲みました、申しわけありません」「これから酒に気をつけろ」「ハイ」で許して貰ったですね。これが思い出ですね。

一月十七日夜、新安鎮に着いたら敵とやってましてね。鉄道警備ですから線路（隴海線）に沿って三カ所に分遣隊が出ているんですが、それが包囲されてどうにもならない。十八日攻撃したが一つだけ救出出来たが死傷者が見渡すかぎり倒れていて悲惨極まりない。野戦病院の兵隊は後方に待機させ状況見ては昼間に配置した伝令に手で合図しながら指揮を取ったが、撃たれましたね。よくあたらなかったと思います。兵隊には前に出るなといっておきました。一三六大隊も気分が弛んでいたんでしょうね、損害多大でした。

六〇大隊は軍医さんが戦闘馴れしていないものですから興奮して「野病何しているんだ。担架が少ないじゃないか」と叫んでいました。私は患者収容に役立つと思って、事前に汽動車をチャーターしてありましたので、「これに早く積め」と命じ、死傷者全部を積んで後退させたので、軍医は黙ってしまいました。

そのうちに増援隊が到着、師団砲兵は山砲を貨車の上からボンボン射ち出しました。しばらくして友軍機が飛来、引揚命令を通信筒で落し、救出不能になった二つの分遣隊には中共軍に投降するよう通信筒を落したそうです。

夜に反転途中、隊の左側を見ると夜目にも物凄い人数が我々と並行している。よくみると新安鎮にいた重慶政府軍の現地人の集団らしい。中共軍はその集団めがけて横から、後から攻めてくる。部隊も横にいられると戦闘のじゃまになるので、気の毒だが追い払うため「撃てー」と上に向けて撃ち始めたらバラバラになって離れていった。戦場の無情を痛感しましたね。

中共軍の追撃を振り切って、部隊は順次後退し、途中で貨車に乗り海州に帰り、負傷者約一〇〇人をトラックに積んで病院に収容しました。

後退途中、最近まで友軍のいたトーチカからバリバリ撃たれた時は、パッと伏せて、ソーッと顔を上げて前方を見たら、銃火が赤い炎の束に見えました。「イカンやられた。もう駄目だ、最後だ」と思いました。幸い野戦病院は一人の死傷者もなく、全員無事帰ることが出来て本当によかったと思います。